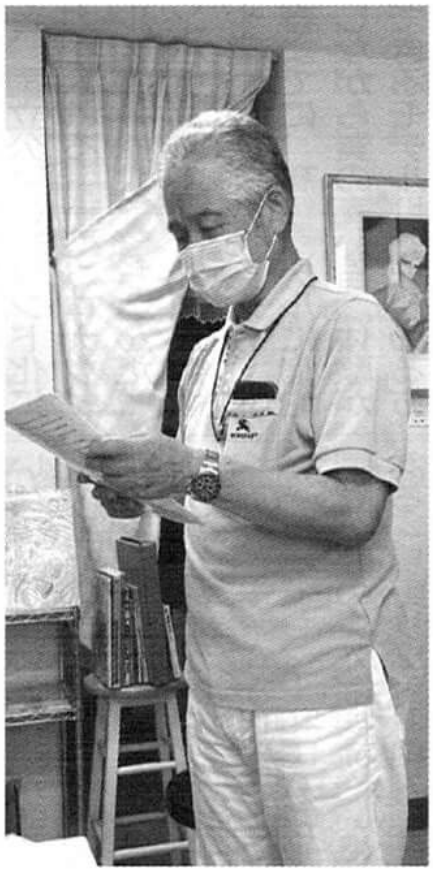
文学性の高さを再評価

宇野千代作品「色ざんげ」読書感想会



東郷青児作品について説明する正木さん（繪悠館で）

岩国市出身の作家・宇野千代（1897～1996年）の名作の一つとして挙げられる小説「色ざんげ」の読書感想会が千代の命日の今月10日に開かれた。

千代の作品を顕彰している宇野千代顕彰会（島津教恵会長）と、市の委託を受けて同市川西の宇野千代生家の開放事業を担っているNPO法人・宇野千代生家（西村宏理事長）が合同事業として初めて行い、両会の有志が集まった。

会場は麻里布町5丁目の医師・正木康史さんが自宅近くに作った私設ギャラリー「繪悠館（かいゆうかん）」（麻里布1丁目、水島眼科跡）。同ギャラリーで今月1日から「東郷青児の世界～ノベルティーの数々～」展（9月16日まで）が行われていることに合わせ、参加者は画家・東郷青児が起こした心中未遂事件を題材に千代が作品化した小説を読み解いた。

冒頭、正木さんが展示品について紹介した。ギャラリーは約80平方㍍。正木さんのコレクションの中でも特に思い入れが強いのは洋画家・東郷青児（1897～1978年）の女性像。東郷の詩情あふれる美人画は一世を風び、油絵やリトグラフにとどまらず、洋菓子店の包み紙や買い物袋、本の装丁、化粧品のパッケージ、雑誌広告など多岐に広がり、昭和の美人画の代表となった。会場には東郷や長女・東郷たまみの油絵作品、東郷作品をデザインした洋菓子の包装紙、絵皿、コーヒーカップのほか、日本レコード大賞の受賞者に贈った東郷デザインのブロンズ像など貴重なお宝が揃っている。

「色ざんげ」は洋行帰りの画家（東郷がモデル）が4人の女性と織りなす恋愛模様を描き出した作品。

参加者からは「タイトルだけをみれば、スキャンダラスな内容に思えるが、文学性はとても高い。90年前の作品ながら現代文学にも通用するもので、再評価されても良いのではないか」、「《おはん》にも共通する男女の複雑な心情が描き出されている」、「若い頃に読むのと、今になって読むのではかなり印象が異なる。かつては男の倫理観が気になったが、再読すると男をとりまく女性たちが有名人に近づきたいという名誉欲やしたたかさなども感じられるようになり、多面的、多層的な文学の深さを思った」、「当時の社会や時代背景も興味深いものだった。宇野先生の筆致は繊細で感情がとても豊か。登場人物の内面描写や心情の変化も面白かった」などの感想が交わされた。

島津会長は「読者に深い感銘を与える作品だと思います」と評価、次回は宇野千代作品の「風の音」をテーマに読書会を続けることにした。

「色ざんげ」読書会で感想や意見を交わした参加者